

# 今治の歴史再発見

～旧市内編～

期間：令和2年4月25日～8月16日  
場所：今治中央図書館1階ロビー

## はじめに

今治の歴史というと、どのようなものが思い浮かぶでしょうか？  
むらかみかいぞく おおやまづみじんじゅ  
今治城や村上海賊、大山祇神社を挙げる人が多いかもしれません。  
もちろん、どれも魅力的で今治の歴史上とても大事な存在です。  
しかし、それら以外にも今治には多くの歴史的なものが残されていることをご存じでしょうか。

今回は「今治の歴史再発見」と題して、旧今治市内にある国指定史跡2件、県指定史跡5件をご紹介していきます。

## 史跡とは

史跡とは、古墳や城跡といった遺跡のうち重要なものとして国や地方自治体が指定して保存するものです。国宝や重要文化財の遺跡版を考えると分かりやすいかもしれません。

文化財保護法では「貝づか、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの」とし、史跡の中でも特に重要なものは国の特別史跡に指定されます。



今治市史跡関連年表	
年代	時代
紀元前 5世紀頃	縄文
紀元前 3～4世紀	阿方貝塚
	弥生
3世紀 中頃	古墳
6世紀末	日高鯨山の古墳
710年	飛鳥奈良 永納山城跡 伊予国分尼寺塔跡 伊予国分寺塔跡
794年	
1185年	平安
1336年	鎌倉
1573年	室町
1603年	江戸
1868年	明治 今治城跡 今治藩主の墓

# いよこくぶんじとうあと 国指定史跡 伊予国分寺塔跡

## 史跡の概要

伊予国分寺塔跡は今治市国分の唐子山西南麓に位置し、現在の国分寺から東へ100m程離れた場所にあります。奈良時代に創建された伊予国分寺の東塔のものと考えられる基壇と礎石が残っています。現在は基礎部分しか残っていませんが当時は七重塔が建てられていたと考えられます。

この遺跡の重要性は古くから認識されており、今からおよそ100年前の大正10（1921）年に国指定史跡となっています。



伊予国分寺塔跡

## 国分寺とは

国分寺は天平3（741）年に発せられた聖武天皇の詔により、日本全国に建立された寺院です。僧寺と尼寺の2つがあり、僧寺は正式名称を金光明四天王護國寺とといい、国家鎮護のために建てされました。国分寺には金堂や講堂、塔、僧房等の施設が造られ、塔は経典を納める役割をもった重要な施設です。

伊予国分寺の創建年ははっきりと分かっていませんが、『続日本紀』の記述から766年までには完成していたと考えられています。伊予国分寺は藤原純友の乱をはじめとした戦火によって幾度も焼失しており、そのたびに再建されてきました。現在の場所には江戸時代に移転しています。



現在の国分寺



伊予国分寺塔跡の礎石

\*1 基壇：建造物を建てるためにつくる土台のこと。礎石：柱などを支える石のこと。

\*2 金堂：本尊を安置する建物、本堂。 講堂：僧侶が経典の講義や説教をする建物。僧房：僧侶が生活するための建物。

\*3 平安時代初期に編纂された歴史書。天平神護2（766）年に伊予国分寺が寄進を受けた記述があり、この頃までに完成したと考えられる。

\*4 天宝2（939）～天慶4（941）年にかけて藤原純友が朝廷に対しておこした反乱。伊予国を含む瀬戸内周辺の国府を襲い、一時は大宰府も占領した。平弱門の乱とあわせて承平天慶の乱と呼ばれる。

## 塔跡

通常、国分寺には東塔と西塔が建てられていますが、この塔跡がどちらであるかは不明です。現在は基壇と礎石が12個残されています。周辺が大きく削平されているため正確な規模は不明ですが、本来は17.4m四方の範囲に基壇をつくり1辺10.2mで礎石を配置したと考えられます。発掘調査では、現存する礎石のうち、元位置あるいは元位置からあまり動いていないものは5つであることが判明しています。

国分寺には七重塔が建てられることがほとんどであるため、この礎石の上にも七重塔がそびえていたと考えられます。塔の高さは60m以上あったとする説もあり、当時の伊予国分寺の勇壮さをうかがい知ることのできる貴重な遺跡です。

### 関連遺跡

### 伊予国分寺跡

伊予国分寺塔跡とその周辺ではこれまで6回の発掘調査がおこなわれています。第4次調査では屋根瓦が倒壊した状態で発見されました。瓦には様々な時期のものが混在していましたが、最も新しい瓦が12世紀ごろのものであるため、そのころに倒壊したようです。倒壊瓦は人為的に埋め戻されたものと思われ、戦乱によって破壊された可能性も考えられます。瓦以外ではすずり、ほくし、どき<sup>※5</sup>、とき<sup>※6</sup>、じき<sup>※6</sup>、硯や墨書き土器、赤色塗彩土師器などが見つかっています。これらの出土品は古代寺院や官衙跡で多く発見される典型的なものです。



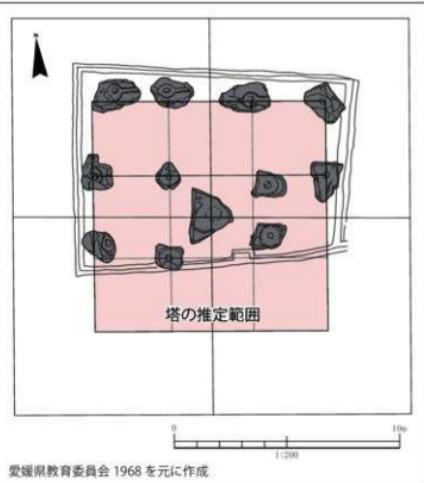
軒丸瓦



墨書き土器



赤色塗彩土師器



愛媛県教育委員会 1968年を元に作成

伊予国分寺塔跡平面図



倒壊した屋根瓦

※5 墨で字が書かれた土器。硯とともに当時の識字層（役人や僧侶等）の存在を示す資料。写真的土器には「片塙」と書かれている。

※6 春い顔料が塗られた土器。写真的土器はすすぐ付着しており、灯明皿（油を注いで火を灯すための器）として使われた。

※7 役所のこと。古代には国ごとに国衙（現代でいう県庁）が置かれ、伊予国では今治平野に存在したとされる。

# えいのうさんじょうあと 国指定史跡 永納山城跡

## 史跡の概要

永納山城跡は西条市河原津・楠と今治市孫兵衛作に位置する古代山城です。指定範囲のほとんどは西条市ですが、一部が今治市に含まれています。  
烽灘を一望できる場所に築かれており、周辺には南海道の想定ラインが通るなど、陸・海の交通を意識した場所に造られています。その範囲は広く約40haにおよび、城壁は約2.5kmの長さがあります。平成17(2005)年に国史跡に指定されました。



永納山城

## 古代山城とは

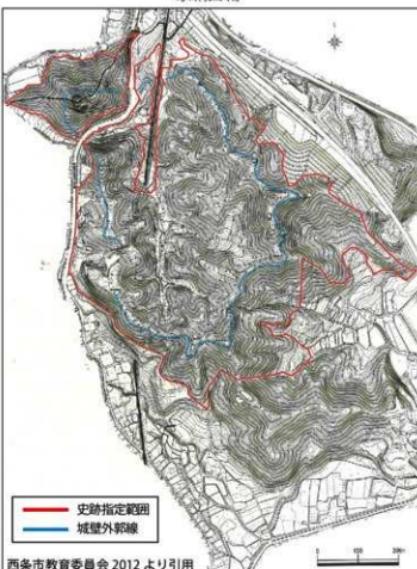
古代山城は7世紀後半に築かれた城で、全国で30弱が確認されています。白村江の戦いに端を発する国際情勢の緊張を理由に九州から瀬戸内沿岸部に造られました。日本書紀などの文献に登場するものを朝鮮式山城、みられないものを神籠石(式山城)と呼びます。永納山城は文献で確認されていないため、神籠石に分類されます。



永納山城跡内部



永納山からの展望（西条側）



永納山城跡の指定範囲



永納山城跡の列石

## 発掘調査の成果

永納山城跡は昭和52(1977)年に発見され、発見後は東予市教育委員会によって2度の調査が実施されました。その後は西条市教育委員会による発掘調査が行われています。土塁や列石、石積みといった構造が残されており、一部では自然の岩盤を利用した城壁もあります。また城の内部からは鍛冶炉や炭置場等の鍛冶に関連するものが見つかっています。出土品の量は少ないですが、土師器や須恵器、鍛冶関連遺物が確認されています。

\*1 古代に設置された畿内南部から4国にかけての街道。

\*2 663年に朝鮮半島であった倭国・百濟軍と唐・新羅軍との戦い。この戦いに敗れた倭国は唐・新羅の侵攻に備えて古代山城や水城、防入を配備した。

\*3 土塁：土で造られた城壁。列石：土塁の基礎部分に並べられた石。

# 県指定史跡 阿方貝塚

## 史跡の概要

阿方（貝塚）遺跡（以下、阿方遺跡）は今治市阿方に位置する弥生時代を中心とした遺跡です。古くからその存在は知られており、戦前には明治大学による発掘調査が行われています。阿方貝塚から発見された装飾性の高い土器は「阿方式土器」と呼ばれ、瀬戸内海沿岸地域の弥生時代前期末～中期初頭（約2,300年前）の基準資料となっています。昭和23（1948）年に県史跡に指定され、現在は史跡公園として整備されています。



現在の阿方貝塚

## 阿方式土器とは

阿方式土器は、弥生時代前期末～中期初頭（今から約2,300年前）に瀬戸内海周辺地域で使われていた土器の総称です。阿方遺跡で見つかったものが最初に注目されたため「阿方式」と呼ばれるようになりました。壺や甌の表面を磨き上げ、突帯文や沈線文などの文様で飾ることが特徴です。



突帶文



沈線文



阿方式土器

## 発掘調査の成果

近年では、愛媛県のしまなみ海道建設に伴う発掘調査や今治市による試掘調査など何度かの調査が行われています。これらの調査で阿方遺跡からは、縄文時代晚期から古墳時代後期にかけての出土品が発見されています。出土品の種類も豊富で、阿方式土器を含む弥生土器や縄文土器などの土器類、石器（石包丁、石斧など）、木器（鍬、弓など）、骨角器などが見つかっています。これらの出土資料には、縄文時代の終わりから弥生時代にかけてのものも含まれており、弥生文化の広がりを考える上でも非常に重要なものです。



阿方遺跡位置図

\*1 突帶文：ひも状の粘土を貼り付けた文様。  
沈線文：ヘラや柳の工具で線を引いた文様。

\*2 稲穂を摘むための道具。明治時代には包丁のような使い方と考えられていたことから石包丁と名付けられ、そのまま用語として定着した。

\*3 駄持や角、牙などを利用して作られた道具。

# ひだかくじらやま 県指定史跡 日高鯨山の古墳

## 史跡の概要

日高鯨山の古墳（以下、鯨山古墳）は今治市馬越町の独立丘陵上に造られた古墳時代後期（6世紀）の古墳です。現在は三島神社と安養寺が建てられています。かつては前方後円墳と考えられていましたが、1961年の測量調査によって円墳の可能性が高いことが判明しています。発掘調査がされておらず詳細は不明ですが、円墳の場合は直径60m程度の規模になると予想されています。

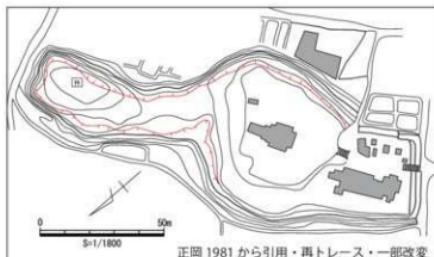
昭和25（1950）年に県史跡に指定されました。



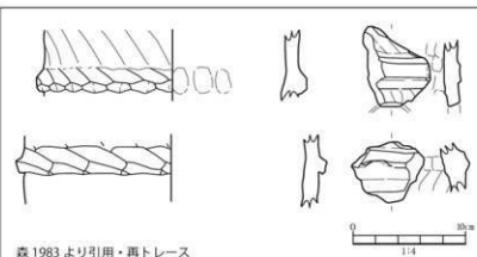
現在の鯨山古墳

## 鯨山古墳の埴輪

鯨山古墳は発掘調査が行われていないため、正確な規模やどのようなものが副葬されているかは、いまだ不明のままであります。かつて電探調査が行われた際には、頂上部から西寄りに石室らしき反応があったという記録も残されていますが、実際に確認はされていません。出土品として埴丘上で円筒埴輪の破片が採集されていることから、当時は古墳に埴輪が並べられていたと考えられます。鯨山古墳の円筒埴輪はいずれも小片であり、その全容をうかがい知ることは出来ません。しかし、残された部分の特徴から推測すると、概ね6世紀代のものと考えられます。



鯨山古墳測量図



森1983より引用・再トレース

鯨山古墳出土円筒埴輪

## 鯨山古墳の被葬者

鯨山古墳の特徴として、①今治平野の独立丘陵上に造られており立地が卓越していること、②円墳ではあるものの規模が他の古墳よりも際立って大きいこと、③円筒埴輪が並べられていた可能性が高いことが挙げられます。これらの特徴から鯨山古墳に埋葬された人は周辺を治める首長であった可能性が高いと考えられます。乎致命の墓とする伝承も残されていますが、真偽のほどは定かではありません。いずれにせよ当時の今治地域で大きな権力を持っていた人物の墓であることは確かと言えるでしょう。

\*1 平面形が四角と円形を組み合わせた瓣宍状である古墳。

\*2 平面形が円形の古墳。古墳の中でも最も数が多い。

\*3 古墳上に樹立される簡約なやきもの。人形や動物形のものは形象埴輪とよばれ、円筒埴輪とは区別される。

\*4 古墳時代に今治周辺を治めていたとされる古代豪族。越智氏の祖先とされる。

天正7（1579）年の三島大祝安住の手記に「小市獅子御墓在馬越邑」とあり、この頃には鯨山古墳を乎致命の墓とする伝承があったことが分かる。

# いよこくぶんにじとうあと 県指定史跡 伊予国分尼寺塔跡

## 史跡の概要

伊予国分尼寺塔跡は今治市桜井に位置する寺院跡です。国分尼寺は天平3（741）年の詔によって國分寺とともに建立された寺院で、正式名称は法華滅罪之寺<sup>※1</sup>と言います。指定当時は伊予国分尼寺<sup>※2</sup>の塔跡とされていましたが、現在では他中庵寺<sup>※3</sup>という別の寺院の堂跡と考えられています。基壇の一部と6つの礎石が現存します。

昭和31（1956）年に県史跡に指定されました。



伊予国分尼寺塔跡

## 史跡について

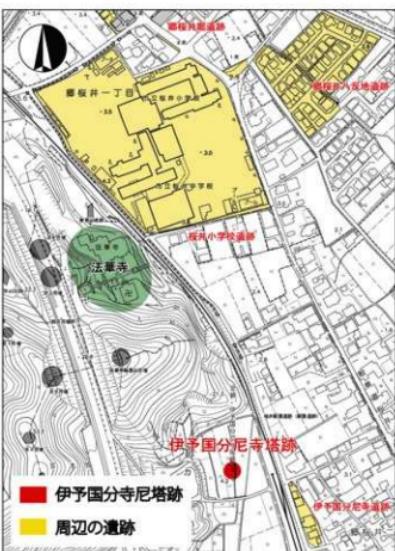
登録名が伊予国分尼寺塔跡とされているため分かりにくいですが、現在では伊予国分尼寺塔跡ではないと考えられています。その理由として、国分尼寺は塔をもたないこと、塔であるとすれば丘陵に近く伽藍配置上他の建物が入らないこと、塔跡とするには規模が小さいこと、国分尼寺よりも古い瓦が周辺で採集されていることが挙げられます。そのため、国分尼寺創建以前にあった寺院の堂跡と考えられており、地名から他中庵寺と呼ばれています。

## 伊予国分尼寺の位置

伊予国分尼寺は、現在の桜井小学校周辺にあったとする説が有力視されています。桜井小学校の敷地内で発掘調査が行われた際には、寺域を区画していたと考えられる溝や古代瓦が見つかっています。また、桜井小学校すぐ近くの丘陵には法華寺<sup>※4</sup>という寺院が残されており、この法華寺の前身が国分尼寺であった可能性が高いです。法華寺は江戸時代に現在の場所に移設したという記録が残されており、それ以前は桜井小学校の周辺にあったと考えられます。



現存する礎石



伊予国分尼寺塔跡位置図

※1 法華經を主要な經典としたことに由来する。

※2 伽藍は金堂や塔、門などの寺院に造られた建物の総称。

建物の配置には規則性があり、配置の仕方によって法隆寺式や四天王寺式などに分類される。

## 史跡の概要

今治城は築城の名手として知られる藤堂高虎によって築かれた城です。慶長7（1602）年に築城を開始し、慶長13（1608）年頃に完成したと考えられています。海水を引き込んだ大きな堀や、船入という大規模な港を備えており、日本三大海域のひとつに数えられます。寛永12（1635）年の藤堂氏移封後は松平（久松）氏の居城となりました。明治の廃城時に取り壊されましたが、内堀と主郭部の石垣が現存しています。

昭和28（1953）年に県史跡に指定されました。

## 今治城の特徴

藤堂高虎の築いた城の特徴として、高い石垣と幅広の堀、長大な多門櫓を持つこと、虎口に楕形の区画を設けるなどが挙げられ、これらの特徴は今治城でもよく見られます。特に楕形虎口に二重構えの城門を設けることは今治城で初めて採用され、高虎の築城技術の集大成といえる城です。この二重構えの城門は江戸城をはじめとした天下普請の城の多くに導入されており、今治城のものがその祖型となっています。

## 今治城の石垣

今治城は海に面する立地を最大限に生かすため海辺の砂地上に築かれています。そのため地盤が不安定で直接城を築くことが難しく、犬走りという平地をつくりその上に石垣を構築しています。石垣は野面積と角部分が算木積で積み上げられ、最大で約13mの高さがあります。地盤が砂浜であることを踏まるとかなりの高さで、高虎の築城技術の高さをうかがい知ることができます。石材のほとんどは花崗岩ですが、一部に大理石が使われています。大理石が石垣に使われることは少なく、珍しい事例です。



今治城跡



今治城の楕形虎口



今治城の石垣

\*1 戦国～江戸時代にかけての武将・大名。築城の名手として知られ、江戸城の改修にも関わっている。

\*2 石垣上に建てられた長方形の櫓。※3 城の出入口のこと。

\*4 楕形（方形）の空間が設けられた城の出入口。櫓に入ってきた敵を多方向から攻撃できる利点がある。

\*5 江戸幕府が諸国大名に行わせた土木工事。城郭以外にも道路や河川工事も含む。

\*6 野面積：自然石を加工せずにそのまま積み上げる技法。算木積：加工した細長い石を互い違いに積み上げる技法。

## くろがねぐらん 鉄御門の再建

平成 16（2004）年に今治城築城 400 年を記念して樹形石垣と門櫓、鉄御門の再建が開始されました。建物自体は明治 4（1871）年に焼失しており、石垣もその後に取り壊されていました。再建にあたって発掘調査が行われ、その成果に基づいて石垣や建物が再建されています。

ほこまる第7

鉄御門は本丸正門専用の城門で、今治城の中でも最も重要な建物の一つです。扉や柱に鉄板が打ち付けられていることからその名が付いたと言われています。鉄御門は大大名の城にしか見られず、四国では今治城のほかに高知城でしか確認されていません。また、鉄御門すぐ横の石垣には幅約 4.6m、高さ約 2.4m、重さ約 16.5 t の勘兵衛石と呼ばれる鏡石が置かれています。勘兵衛石の名称は藤堂高虎に仕えた渡辺勘兵衛という人物に由来しており、この渡辺勘兵衛が今治城築城の際に指揮を執ったと伝えられています。



復元された鉄御門と勘兵衛石

## 今治城の出土品

今治城はこれまでに 6 度の発掘調査が行われ、土器や陶磁器、瓦、土管、銃弾など様々な出土品が見つかっています。土器は鍋や釜、擂鉢、椀、皿、鉢などの生活用品を中心に出土し、陶磁器は瀬戸美濃焼、唐津焼、備前焼、京焼などが搬入されています。銃弾は火縄銃の玉がほとんどですが、一部洋式のものも含まれています。築城された 17 世紀から廃城となった明治頃までの出土品が確認されています。



軒丸瓦



瀬戸焼・呂宋



銃弾



軒平瓦



唐津・大皿

\*7 城の中核となる区画。

\*8 城の入口に置かれた巨大な石。攻めてきた敵に威圧感を与え、来訪者には権力を示すために置かれた。

\*9 呂宋（ルス）は 18 世紀末から幕末にかけて瀬戸で生産されたやきもの。緑の釉がかかり、貼付文、印花文を施すことが特徴。

# 県指定史跡 今治藩主の墓

## 史跡の概要

今治藩主の墓は、今治市古国分の唐子丘陵東麓に位置する歴代今治藩主の墓所です。今治で亡くなった初代藩主松平定房、3代定陳、4代定基の3人がまつられています。3人の墓碑として宝篋印塔3基が建てられており、いずれも3.6mの高さがある立派な石塔です。石塔へ至る参道には石灯籠67基が並べられ、藩主の墓所にふさわしい莊厳な雰囲気が醸し出されています。

昭和34（1959）年に県史跡に指定されました。



## 久松平氏とは

久松氏は古代豪族土師氏を祖とする菅原氏から出た一族とされています。初代藩主松平定房の父である松平（久松）定勝は徳川家康の異父弟にあたる人物で、その関係によって家康から松平姓を名乗ることを許されました。松平姓を与えられた定勝ら3兄弟の家系を久松松平氏と呼びます。

定勝には6人の男子がいましたが、次男定行が伊予松山藩主、5男定房が今治藩主となっています。

### 初代 松平定房（1604～1676）

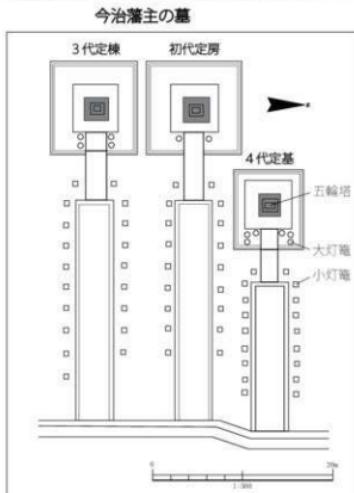
松平定勝の五男で徳川家康の甥にあたる。寛永12（1635）年に今治藩3万石を与えられ、今治城に入城した。江戸城大留守役を任されるなど幕府の信頼が厚い人物だった。

### 3代 松平定陳（1667～1702）

2代藩主定時の次男。藩政を改革し以後の今治藩政の基礎をつくった。新田や塩田の開発を行うなど、農産業の振興にも力を注いだ。

### 4代 松平定基（1687～1759）

3代定棟の長子。度重なる自然災害の被害によって財政難に陥った藩政を立て直そうとした。治水政策を推進し、葛社川の瀬掘りが開始されたのも定基の時である。



今治藩主の墓配置図



初代墓



3代墓

※1 墓や供養塔に使われる塔。本来はお経を納める塔だったが、江戸時代ごろからは墓として建てられた。

※2 留守居は大奥の取り繕りや荷車不在時の警護などを担当した役職。大留守居はそのまとめ役。

※3 月底の土や砂礫を振り下げ、その土で堤防を増強する作業。宗門振りともいう。

## 調査の成果

今治藩主の墓は、平成 13（2001）年の芸予地震によって崩落やズレなどの被害が発生し、翌年震災復旧のための調査が行われました。

初代墓では宝篋印塔から 94 枚の錢貨が見つかって、一部のものは石のがたつきを抑るために石の間に挟み込まれていました。錢貨はほとんどが寛永通宝で、元豊通宝と永楽通宝が数点確認されています。

3代墓からは柄鏡 2 面と磁器製の合子が発見されました。下写真左の柄鏡には久松平家の家紋である星梅鉢文に加え松と南天が描かれ、「天下一中村越後守吉次」という銘文が入っています。

下写真右の柄鏡は松竹と鶴亀の文様があり、「天下一藤原重富」の銘文がかかれています。柄には藤が巻き付けてあります。また、鏡面に紙と布の痕跡が残されていたことから、紙を当ててから布に入れ埋納したと考えられます。合子は口紅等を入れた容器と考えられ、これらの品は3代藩主定棟に関係する婦人によって埋納された可能性が高いです。



初代墓の組み立て作業



寛永通宝



元豊通宝



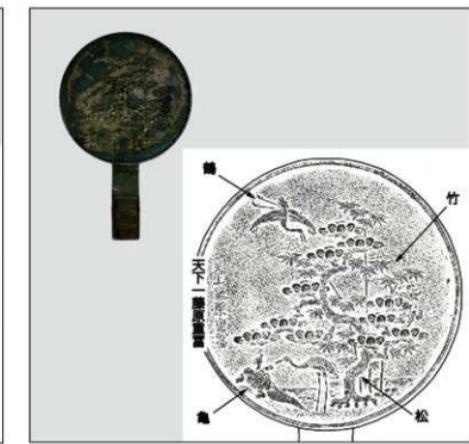
永楽通宝



星梅鉢文



合子



柄鏡

\*4 寛永通宝：寛永 13（1636）年初鋤。元豊通宝：北宋践、1078 年初鋤。永楽通宝：明践、1411 年初鋤。

\*5 柄のついた鏡。日本では室町時代から作られ、江戸時代に広く普及した。

\*6 盆付きの小さな容器のこと。お香や化粧品を入れるために使われた。

\*7 松竹梅や鶴亀など縁起の良いモチーフが描かれることが多い。南天は「難（なん）を転（てん）じて福となす」にかけて縁起が良いとされる。

## おわりに

今治市は多くの遺跡や文化財が残された歴史ある町です。今回はその一例として旧市内に位置する史跡をご紹介しました。史跡や文化財と聞くと縁遠い印象があるかもしれません、実は身近な場所にも多く残されています。時には史跡を訪れて、先人が残した歴史や文化に触れてみてはいかがでしょうか。

### 主な参考文献

#### 【伊予国分寺塔跡】

- 今治市教育委員会 1997『市内遺跡試掘確認調査報告書V』今治市埋蔵文化財調査報告書第35集  
今治市教育委員会 1998『市内遺跡試掘確認調査報告書VI』今治市埋蔵文化財調査報告書第42集  
今治市教育委員会 1998『市内遺跡試掘確認調査報告書VII』今治市埋蔵文化財調査報告書第43集  
今治市教育委員会 2001『伊予国分寺跡確認調査』今治市埋蔵文化財調査報告書第61集  
今治市教育委員会 2011『松木広田遺跡－第5・6・7次調査 伊予国分寺跡－第5次調査一 脇中屋遺跡 小泉角田遺跡－第4次調査一 登畠遺跡－第3次調査一 上徳豊田遺跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第105集

愛媛県教育委員会 1968「伊豫國分寺發掘調査概要」「愛媛の文化」第八号、(社)愛媛県文化財保護協会

(財)愛媛県埋蔵文化財センター 2017『伊予の古代 一未知なる伊予国府の探求に向けてー』

大山正風 1968「伊豫國分寺出土古瓦考」「愛媛の文化」第八号、(社)愛媛県文化財保護協会

町田 章 1987『国分寺』『新修 国分寺の研究』第五巻上 南海道、吉川弘文館

#### 【永納山城跡】

- 西条市教育委員会 2005『永納山城跡』  
西条市教育委員会 2009『史跡永納山城跡I』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集  
西条市教育委員会 2012『史跡永納山城跡II』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集  
西条市教育委員会 2015『永納山城跡国史跡指定 10周年記念シンポジウム資料』  
西条市教育委員会 2018『史跡永納山城跡III』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

#### 【日高岡山の古墳】

- 正岡睦夫 1981「愛媛県における前方後円墳の再検討」「遺跡」第20号  
正岡睦夫 1983「今治市日高的丘陵とその周辺の考古学的調査」「遺跡」第24号  
森 毅 1983「今治西高校保管考古学資料 墳輪 一今治地域円筒埴輪の検討ー」「遺跡」第23号  
山内英樹 2006「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(6)」「紀要愛媛」第6号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター  
山内英樹 2008「伊予の埴輪編年」「紀要愛媛」第8号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

#### 【阿方貝塚】

- 今治市教育委員会 1985『今治の歴史』  
今治郷土史編さん委員会 1988『今治郷土史 考古 資料編 原始』今治市役所  
愛媛県教育委員会 1982『愛媛県史 原始・古代I』  
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第84集  
柴田昌児 2000『伊予東部地域』「弥生土器の様式と編年 四国編」木耳社

#### 【伊予国分尼寺塔跡】

- 今治市教育委員会 1981『富田小学校・桜井小学校屋内運動場』今治市埋蔵文化財調査報告書第6集  
今治市教育委員会 1988『桜井中学校遺跡発掘調査報告書』今治市埋蔵文化財調査報告書第11集  
今治市教育委員会 1983『桜井小学校プール』今治市埋蔵文化財調査報告書第8集  
今治市教育委員会 1999『伊予国分尼寺遺跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第48集  
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1987『伊予国分尼寺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第20集  
(財)愛媛県埋蔵文化財センター 2017『伊予の古代 一未知なる伊予国府の探求に向けてー』  
西田 栄 1987『国分尼寺』『新修 国分寺の研究』第五巻上 南海道、吉川弘文館

#### 【今治城跡】

- 今治市教育委員会 1980『今治城跡』今治市埋蔵文化財調査報告書第5集  
今治市教育委員会 1982『次揚神社』今治市埋蔵文化財調査報告書第7集  
今治市教育委員会 1985『今治の歴史』  
今治市教育委員会 1990『今治城跡III』今治市埋蔵文化財調査報告書第13集  
今治市教育委員会 2006『市内遺跡試掘確認調査報告書XII』今治市埋蔵文化財調査報告書第80集  
今治市教育委員会 2013『史跡 今治城跡－第6次調査一』今治市埋蔵文化財調査報告書第120集  
今治城築城・開町4百年祭実行委員会 2008『今治城鉄門再建整備事業報告書』  
高虎サミット 2014『高虎の城づくり～瀬戸内を支配した海城～』

#### 【今治藩主の墓】

- 今治市教育委員会 1985『今治の歴史』  
今治市教育委員会 2004『市内遺跡試掘確認調査報告書XVII』今治市埋蔵文化財調査報告書第74集  
今治城 2016『今治藩主 久松松平氏の世界』